

# 暮らしと自治 くまもと

2021年11月号

第181号(通巻244号)

NPO法人 くまもと地域自治体研究所  
 熊本市中央区神水1-30-7 コモン神水  
 TEL & FAX 096-383-3531  
<http://k-jitiken.blogspot.com/>  
 メール : km-tjk@topaz.ocn.ne.jp

## 第7回くまもと自治体学校in人吉球磨

### これからの地域づくりと自治体 ~球磨川豪雨災害の原因と教訓を踏まえて~

2021年9月26日 中小企業大学校人吉校

球磨川豪雨災害からの復興に際して、自治体がどのような役割を果たすべきなのか、今後の対策に住民の声をどう届けるのか、被災地の皆さんとともに探っていきたいと考え、シンポジウムを開催しました。会場の中小企業大学校に38名、ZOOMで15名が参加しました。

#### 基調講演「球磨川流域の自然の現状と 豪雨災害との関係」 霧 詳子氏 (自然観察会熊本県連絡会会長)



球磨川には撤去された荒瀬ダム、上流に市房ダムがあります。真ん中に川辺川が流れているわけです。およそ30年球磨川流域のフィールド活動をやってきて、荒瀬ダム撤去後の調査もしていて、山が荒れていると思った時に水害がきました。今日は森林の現状をお話します。

鮎なくしては球磨川の存在はない。それ以上に昔は人々と球磨川の結びつきがとても強かった。地元や流域の人たちは球磨川とともに生活をして



きました。昔は水害という言葉もなくて大水と言っていました。水がどこまで上がってくるのかが大体わかっているので、それに合わせて布団を2階に上げたり、畳や障子を片づけたりして、それを元に戻しながら大掃除もやってしまった、というのが当時の暮らし方でした。この暮らし方が、ダムができたことによって一変します。昭和40年の水害では、大量の土砂が押し寄せ、ダムができるから洪水はいつも土砂が襲うようになりました。

国はダムが必要ということで川辺川ダムを計画しました。当時の五木村の山は森林伐採が盛んに行われていて、禿げ山となり保水力を失って、昭和38年39年40年と連続して水害が起こりました。

#### 第7回くまもと自治体学校in人吉球磨

これからの地域づくりと自治体~球磨川豪雨災害の原因と教訓を踏まえて~

基調講演「球磨川流域の自然の現状と豪雨災害との関係」 … 霧 祥子 …… 1

基調報告「球磨川豪雨災害とその後の行政と住民の動き」 … 緒方 紀郎 … 3

シンポジウム「これからの地域づくりと自治体

~球磨川豪雨災害の原因と教訓を踏まえて~」 ……………… 5

7.4豪雨災害被災地現地見学 ……………… 9

参加者の感想 ……………… 11

コラム肥後の散歩道（北岡秀郎）・注目の書籍紹介・編集後記 ……………… 12

☆  
 もくじ  
 ☆



山の問題や大量の土砂の原因について何も調べずに、ダム建設計画が浮上しました。

いろんな運動が起こり、荒瀬ダム撤去と川辺川ダム中止が決まりました。荒瀬ダム撤去後には水を活かした川遊びや鮎やなを作ったり旅館の再開と、地域の人が一丸となって地域づくりに取り組むようになりました。そんな時に去年の水害が起こりました。犠牲者も出たのに、国交省は検証もしないで唐突に流水型川辺川ダムを言い出しました。

私は、山からの流木や土石が非常に多かったという坂本村の人の証言を多く聞いたので、山に入つてみると、行徳川はずつと流木で埋まっていました。この流木は、周囲の間伐されていない人工林が倒れたというだけではとても説明がつかない状況でした。八代、坂本、球磨村付近は、地質的に崩れやすい所にあります。過去の水害を見てみると、この付近に土砂崩れは集中しています。ここに今回の雨は集中したので、災害も多かったです。水害前から山は下草もなく根っこもむき出しの状態でした。以前、調査に入った時は、16キロ歩いて100メートルも健康な場所はありませんでした。これは大変だと大学の先生にも調査を申し入れていたのですが、予算が下りないと言っているうちに今回の水害が起きました。私は山が崩れたと思いました。例えば、荒瀬ダムのすぐ側も年々崩れできているのを目撃していましたが、今回一気に崩れ落ちました。普通、脊梁はびっしり植物が生い茂って地表が見えないのですが、そこが荒れてしまっていたのです。坂本村を見ると、川からの増水が原因でない山が崩れた所だけをピックアップしてみると150カ所ぐらいありました。この辺は皆伐ではなくて違法伐採や放置伐採木も目立ち、土砂止めや再植林もなくて崩れて当たり前のことです。水上村、球磨村、五木村の上流、標高の高い所ほど皆伐地が目立ちます。周りの人工林もどんどん切られていくことになっていくで



しょう。千寿園の上流には一番大きな皆伐地があり、今も車で行けない状況で、ここから多量の土砂が小川に流れたのです。支流からの災害であるということです。

このように皆伐地には大きな問題がありますけれども、一番の問題は放置林です。放置された人工林は間伐もされないで、山は荒れに荒れまくっています。間伐されても伐採木がそのまま放置されています。杉の根は浅い上に苗で植えるのでさらに浅く、間伐をしないので、大きな木の根も深く伸びないことで土砂崩れが起きやすくなります。人工林も自然林も崩れています。土壌が荒れています。昔は水だけ通せばよかった竣工管が流木や土石で埋められて、このために道路が壊れているという所がすごく多かったです。砂防ダムも土砂が越えて役に立っていません。しかし今、治水協議会で話されているのは、もっと砂防ダムを作るということなので、どうなるのか心配です。

ではどうしたらしいかという問題ですが、日本はすぐ砂防ダム作れとかコンクリート護岸という話になります。球磨川はコンクリート護岸が60%あり、2014年レベルで全国一位です。今回の災害でさらにコンクリート化されると思います。川辺川も自然が残っている堤防も強靭化という名の下にコンクリート化されていくかもしれません。そうすると、支流の雨があつという間に人吉盆地に集まり、あつという間に下流に下ってきます。下流にとつては脅威です。球磨川は何十年もかけて、より早く下流に水流をあげさせるために改修されてきました。千寿園のあった所は、昔は小学校があったのですが、人は住んでおらず田んぼだけがありました。遊水地の役割を果たしていたのだと思いますけれど、堤防やダムを信じたために昔の人なら住んでない所に住むようになりました。土地利用の政策も見直す必要があると思います。今回の水害の甚大な集落を見ると、昔は田んぼであった所に人を住まわせたり、河畔林を伐採したり、また森林の荒廃が招いた結果と言っても過言ではありません。過去50年の治水対策や森林対策、土地利用対策が間違っていたと言えます。そのような検証を一切せずに、国や県はダムを用いた流域治水対策案を作ろうとしています。結局はコンクリートでダムと砂防ダムを作るということです。

今、下流の人々にとっての脅威は瀬戸石ダムです。ダムの橋脚がなければ、私の計算では2.5倍の流下能力があります。去年の豪雨では6,500トン以上流れているので、これがなければ少なくとも16,000トン以上は流れているのではないかと思

います。こういった試算もせずに川辺川ダムです。砂がいっぱい溜まっていた砂防ダムは、去年の水害で壊れ、今では瀬や淵ができる、上流に鮎が上るようになりました。

ヨーロッパでは、流域治水という考え方には変わってきていて、川幅を広くしてできるだけゆったり流すように蛇行させて水が溢れてもいいような土地利用にするという、水もきれいになるし生物にとってもいい自然の治水対策の考えになってきています。これは昔から日本人がやってきた洪水対策でもあると思います。

ヨーロッパでは、現時点では4,984の河川横断構造物が撤去されています。アメリカも1,000以上

撤去されていて、大型ダム撤去の時代に入っています。私は薬剤師なので、循環とバランス、これこそが人間の体でも自然においても必要で、そこを堰き止めればどうなるのか、ということを流域一帯となって考えることが重要だと思います。

滋賀県ではそれを実践しました。住民を巻き込み、議員たちとの議論を重ねていった過程は、ヒントになると思います。自分が住んでいる地域のことは、そこに長年暮らしてきた住民が一番よく知っています。過去代々、どうやって川のリスクと向き合ってきたのか、住民の声をしっかりと聞いて、自治体はそれを検証して治水政策に生かす、そのために尽力してほしいと思います。

基調報告「球磨川豪雨災害と  
その後の行政と住民の動き」  
緒方 紀郎氏（清流球磨川・川辺川を未来に  
手渡す流域都市民の会）

### 球磨川豪雨災害の概要



今日は、球磨川豪雨災害がどんな洪水だったのか、洪水後の国交省や県知事の動き、仮に川辺川ダムがあっても命は守れなかつた、流水型ダムでは命も清流も守れないというお話をします。

球磨川豪雨災害はどんな洪水だったのでしょうか。川辺川合流地点から球磨村渡まですべて川幅の何倍も溢れました。線状降水帯が長時間球磨川流域に流れ続けたからでもあります。球磨村から坂本村にかけて多量に雨が降りました。ところが川辺川とか球磨川本流の上流域は相対的に中流と比べてあまり雨が降っていません。ここにダムをつくってあまり効果がないことがわかります。球磨川上流もあまり降っていないんですけど、市房ダムはほぼ満水になって使い物にならない状況でした。

これまで、山林の渓流から球磨川の支流や本流まで少しでも早く洪水を下流に流すために直線化され、護岸はコンクリートで固められ、各支流の増水が集中するようになりました。そこを空前の豪雨が襲って、人吉から坂本までの中流域では堤防を2メートルも越えるような増水により、甚大な被害が発生しました。青井神社の鳥居はほとんど水没し、これまで最大だった昭和40年の水位を大きく上回りました。災害当日の午前中、テレビでは「市房ダムが緊急放流する」とどのチャンネ

ルでも言いました。ダムが満水になれば緊急放流してより危険ということはわかると思います。昨年の7月4日のような方が想定する以上の豪雨では、ダムも連続堤防も役に立たないということがわかったと思います。ダムが満水となり洪水調整ができなくなります。ダムが緊急放流すれば、満水になるまでダムが貯めこんでいた分下流の水位は一気に上昇します。堤防があることで安心していた人も多いと思います。堤防を越えたら激流が一気に市街地を襲います。堤防があることで洪水を排水できないという面もあります。

### 洪水後の国交省と県知事の動き

洪水の後、3つの委員会が開かれましたが、いずれも行政関係者や中央の学識者のみで、被災者や流域の住民は参加できていません。国交省は豪雨直後の昨年8月に「川辺川ダムがあれば人吉の浸水面積を6割減らした」と主張しました。ところが被災者住民への説明もなければ、公開質問状への答えも一切ありません。川辺川ダムの効果だけが独り歩きして、蒲島知事の流水型ダム要請発言に繋がったわけです。その後、流域治水協議会というのが開かれていますけれど、流域治水と言なながら中心は川辺川の流水型ダムです。この協議会にも住民は含まれていません。流域治水というの、流域すべての関係者と力を合わせて洪水を防ぐという考え方なんですけれども、住民は参加できていません。質問しても全然答えようとしません。国交省は仮に川辺川ダムがあれば、人吉の浸水面積を6割減らせたと言いながら、新たな流水型ダムの場所も規模もこれから検討するといながら、法に基づく環境アセスメントは一連の川辺川ダム計画が続いているからしないと言っています。その場に合わせた都合のいいことしか言ってません。

今年の7月から2回河川整備基本方針検討小委員会が開かれました。これは中央の学者ばかりです。これまで球磨川の基本高水流量は人吉で7,000トンだったんですけれども8,500トンに引き上げると言いはじめました。ところが新たな基本方針の対象洪水から昨年7月の豪雨は除外されています。2010年までの豪雨量に1.1倍をかけて計算しています。新たな基本方針では、昨年7月の豪雨は想定外になります。想定を超える所が広い範囲にあるので、地元の首長さんが「何だこりや」と言ってるのも気になりました。昨年7月の豪雨では、ダムは満水になり連続堤防からは溢れる状況が考えられます。想定を超えると、ダムも連続堤防も役に立たないばかりか、余計に危険です。今後気候変動により想定を超える洪水が来ることも考えられる中、想定外の洪水には対処できない、想定外の洪水では緊急放流する新たな流水型ダムを建設すべきではありません。

### 仮に川辺川ダムがあっても命は守れなかった

仮に川辺川ダムがあっても命は守れなかったという話をします。

球磨川が溢れたのではないかと考えるかもしれませんけれど、山田川や万江川などから溢れた水が、本流から溢れる前にたくさんの人の命を奪っています。特に山田川は川幅が狭くなっている下流でたくさん溢れています。6時頃支流の山田川は氾濫し始め、8時過ぎ頃から川辺川ダムがあれば最高で1.9メートル水位を落としたと言います。ところが亡くなった方の亡くなれた時間を調べてみると、ダムが効果を発揮する前に支流の氾濫で亡くなつておられます。ダムがあっても命は救えませんでした。

5月3日の毎日新聞では、今回の1.3倍の雨で緊急放流していたという資料を国交省は隠していました。もし、球磨川中流を襲った線状降水帯が上部を襲って、仮に川辺川ダムが存在していたら、市房ダムと川辺川ダムは同時に満水緊急放流していたことは明らかです。

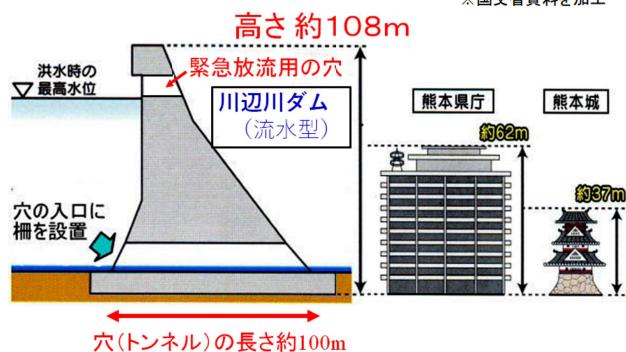
### 流水型ダムでも命も清流も守れない

最後に流水型ダムでは命も清流も守れないというお話をします。

流水型の川辺川ダムは、空前の巨大な穴あきダムとなります。「ダムの一番下に穴が開いている、そこを川が流れるから環境には影響ないよ」というのが流水型ダムですが、規模を見ると高さ108メートルで熊本県庁の倍ぐらい、トンネルの長さは100メートルぐらいになります。ここを鮎が上り下りできますか。上には緊急放流用の穴が開いている、そのような巨大なダムです。日本には5つの流水型ダムが運用されていますが、その中で

流水型川辺川ダム(穴あきダム)のイメージ図

※国交省資料を加工



一番大きい益田川ダムに比べて川辺川ダムは高さが2.3倍、総貯水量にいたっては20倍、水没面積も7倍というとんでもない巨大な流水型ダムですが、それでも環境アセスメントはせんでもよかつて国交省は言っています。

この穴あきダムの最大の欠点は、洪水時に流れ流木などがダムの穴をふさいだら、洪水調節できなくなるという点です。皆さんもご存じだと思いますけれど、洪水時の河川は大量の流木や土砂が流れます。最も穴が大きい流水型ダムの立野ダムの穴は5メートル×5メートルです。流木が流れできたら必ずふさがります。穴というのはスクリーンという柵があります。穴の中に流木とか岩石が入り込んだら撤去不能ですから、全国のダムにはスクリーンが付いています。このスクリーンの隙間は20センチです。川には木の葉などいろんな物が流れていますよ。ここに引っかかれば、どう考えてもふさがりますよね。国交省は、スクリーンに引っかかった流木はダムの水位が上がつたら浮いてくるから穴はふさがらないって言っています。国交省は80分の1の模型を作りて割り箸や爪楊枝を流したら浮いてきたそうです。割り箸や爪楊枝は乾いてますよね。流木には枝とか葉が付いてますよね。

流水型川辺川ダムの穴が流木や岩石でふさがつたら、想定外の洪水では短時間で満水になります。ダム下流の洪水流量は、満水になった時点でふさがっているのでゼロから一気に上昇します。流水型川辺川ダムは緊急放流を引き起こします。蒲島知事は、流水型ダムは緊急放流をしないと言っていました。流水型ダムが満水になったら、緊急放流用の大きな穴がダムの上に開いています。満水になったら滝のように下流に流れ落ちます。流水型ダムでも命も清流も守れません。

本来、治水とは想定外の洪水にも対応できるものであるべきです。想定外の洪水に対応できず危険な放流を行う流水型川辺川ダムは、次の世代のためにも建設してはなりません。

**シンポジウム**  
**「これからの地域づくりと自治体～球磨川豪雨災害の原因と教訓を踏まえて～」**

**コーディネーター**

**高林 秀明氏 (熊本学園大学教授)**



昨年7月の豪雨の原因をしつかり踏まえて、森から海にかけての流域治水のあり方、被災者の生活、住宅の再建、まちづくり、非常に幅広い様々な要因がありますけれども、私たちは治水、まちづくり、復興を進めていく必要があるのではないか。今日は幅広いテーマではありますけれども設定しました。災害が頻発する中で、すべての人に関わるテーマもあります。この人吉・球磨で皆さんと一緒に考えていくと思います。

**人吉市の復興の現状と課題**

**鳥飼 香代子氏 (7・4球磨川流域豪雨被災者の会共同代表)**



被災後1年後を迎えて人吉中心市街地の新しい動きを報告します。様々な案が出されていますが、人吉の復興まちづくりには3つの留意点を考えています。1点目は公共施設の立地傾向は分散型立地です。球磨川の南側に市役所、医療センター、城址があります。ここは市役所が完成すれば一定の消費を生み出すと思われます。旧商店街、九日町界隈は、駅やバスターミナル、高速インターフェース、カルチャーパレスなどがそれぞれ2、3キロ離れて分散しています。公共施設の集積効果を活用した町の賑わいを生み出しにくいです。商業の衰退の影響をストレートに受けてしまうところを再生していかなければならない、ということです。カルチャーパレスやスポーツパレスがありますが、そのすぐ側にイオン、マック等の大型店がはりつきました。イミも12月オープンを目指していて、みんなとても心配しています。これが大きな課題です。

2点目3点目、人吉は大型店の立地誘導がされてないので、一番良い場所に大型店が来ていて、小売店の立地上の優位さがなく非常に厳しい状況です。もう一つは、自動車優先の道路構造になっているので、有料駐車場に停めた場合、早く用事を済ませて帰ろうとするので、回遊性を生み出す

ことはできません。なるべく歩く、自転車、公共交通を使って町中に来てもらって、コーヒーを飲むとか食事をするとかしてお金を落としてもらう仕組みを作らなければいけない。今、そのことに気づいたホテルや駅前、公園などにレンタサイクルが置かれ始めました。

中心市街地住民の希望をまとめてみました。「九日町通りを一方通行にして、散策用の歩道を作る。歩道にはベンチを置く。球磨川護岸を親水空間として整備してほしい。九日町通りを住民の日常生活に還してほしい」「中心市街地界隈に公園を確保してほしい」「小規模の集会所や多目的に使える建物や広場を確保してほしい」「中心市街地が今までは消費が帰ってこない。災害復興住宅を作ってほしい。そうすれば町中の商店が生きていけるかもしれない」「町中に残る伝統的な建造物の再生、路地裏の再生など歴史的町並みを再建してほしい」などが出されています。実際は、古い建物はどんどん壊されています。伝統的な建物は文化財でもあるし、観光資源でもあります。これらに補助をしないとなくなってしまいます。道路整備についても、遊歩道、自転車道等の設置も考えられていません。これでは人吉は単なる通り道で終わってしまいます。

また復興住宅に関しては、戸数が示されていないし、他の公営住宅と同じ家賃になるという話も出ていて、住民は戻ってこられるのか心配です。東にある能力開発センターは、災害者向けの住宅を建てるから、能力開発センターを閉鎖するか引越ししてほしいと、市役所が言っているそうです。これは地域から働き手を追い出ことになるのでやめるべきです。水との共生型の住宅も世界中にたくさんあるので、人吉型の共生住宅を検討していきたいと思っています。

町の中は解体が進み、砂ぼこりが舞っている状態です。地域では旅館や飲食店が開店はじめ、少しずつ活気が戻ってきています。お年寄りの集まる場所や子どもカフェなど、地域の人々やボランティアが中心になって開かれ、みんなで「やれることは何でもやろう」と前向きに動き出しています。

**球磨村神瀬地区の復興の動き**

**岩崎 哲秀氏 (「こうのせ再生委員会」発起人、球磨村神照寺住職)**



球磨村神瀬地区は、球磨川に架かる100メートル級の鉄橋が5、6本流れ、道路は3、4か所土砂崩れで、人吉には八代から芦北を回って行くという生活が半年近く続きました。神瀬地

区では球磨川の本流の氾濫と支流の山腹崩壊土砂崩壊による山津波、土砂崩れの両方が起こった地域です。住民の被災後の動きをお話しします。

8月末にこうのせ再生委員会という住民集会を起ち上げました。片づけに帰って来ようにも断水が私の所で2か月、4か月、長い所は8カ月続き、30分ぐらいしか滞在できませんでした。そこで泥まみれだった集会所を掃除して復活して、毎週土曜日に住民集会を始めました。ところが球磨村には認められなかつたので、行政の地区別協議会を委員会の日取りに合わせてやってもらうことにしました。どの地域も被災しているので、神瀬地区だけではなく渡地区、錦町と会場を回って開きました。「ふるさと再生の集い」と名前を変えて、補助金を受けるための組織だけれど、今後は球磨村、人吉市、芦北町、坂本町の住民同士で関わろうということです。県がやっていた「まちづくり懇談会」に知事が来た時に、要望書を提出しました。自然災害ではあるけれど、コロナ禍なので複合型災害であると主張しました。女性たちが賄いでボランティアの方たちに食事を提供しました。

「炊き出し」と言うとコロナ禍で保健所がダメと言うことから、「賄い」と言いました。地区に残っている人にも食事を配り、話し相手も務めています。

国交省による復興計画に基づくまちづくり作成委員会がありました。神瀬地区は水位が5、6メートルだったのですが、10年後には3メートルになるから、この高さでいいかという話をしていました。それでは住民が納得できません。その問題が今起きています。おそらく他の地域でも同様でしょう。その10年間はどうなるんですか。今後、神瀬地区他の地区も含めた住民がどう思っているのか、それを行政に知つてもらいたい、それだけです。

1回だけでいいから言いたいです。住民が不安がっていることを伝えたいんです。

## 山の荒廃と山間河川の危機

中島 康氏（子守唄の里五木を育む清流川辺川を守る県民の会代表）



35年前から原生林の保護運動をしていて、問題になったのは皆伐です。それまでは部分的に切られていたんですが、大規模伐採が行われ、原生林が切られ、杉の植林が行われました。40年前の伐採は根を残していたので、ひこばえが出て自然林に戻るのですが、植林すると密集して植えるので、陽があたらず木の根が枯れてしまいます。密植して大きくなつた杉が売れるようになるとまた切れます。そうすると、地面

を支える大きな木の根が完全になくなります。さらに今は刺し芽で苗を作るので、直根がなく横に広がるだけです。そういう状態で今回の水害が起つたと思います。

国はダムを作つて流域治水と言つて、山の保全にも触れていますが、山のことは全然知りません。今一番困るのは、密植した杉が生えているので下草が生えていません。鹿の害もすごくて、出た草を芽から食べてしまつて地表にほとんど下草がありません。

もう一つは、間伐した木がそのまま転がしてあるんですね。それが山から流れ落ちてきました。昔の人たちは、山で木を伐る時は切り落とした枝とかを泥埋め作業をしてました。木こりの人たちのマナーでした。今回見て歩いたら、泥埋めをしている所はほとんど崩れていませんでした。

先日阿蘇外輪山の地蔵原高原に行ってみたら、昔の山の形が残っていました。杉を適当に間伐してあるので、根 笹がぎっしり生えていました。そういう所は水を流して土は流さないそうです。山の保全のために植林したり間伐したりしても、効果が表れるのは50年後です。その間をどうするか、ということを私たちは考えなくてはいけないのじゃないかなと思います。そのためには下草、低頭木がびっしり生える山をつくることが一番急がれているんじゃないかなと思います。

## 球磨川水害を山から考える

霧 詳子氏（自然観察会熊本県連絡会会長）



治水は理想的にはコンクリートを使わなくてもできると思います。それにはすごい年月がかかります。今回の山崩れでも、植林してゆっくり育つのを待つべきいいという所がありますが、表層が残っているかどうかで変わります。ものすごい表層崩壊で岩盤まで崩れているような所というのは、植林して戻るには1千年2千年かかるかもしれません。次回、雨が降つたら崩れそうな所もあります。箇所の程度によって違うので、林野庁はその原因も含めて精査して、どういう状態であるかを見て、昔はどうやっていたのかとか知恵を出し合つて、短期的、中期的あるいは森林の土壌ができるまで長いスパンを考えて、今はコンクリートでもゆくゆくはコンクリートもなくしていこうね、というのは可能じゃないかなと考えています。今は、同じような雨が降つたら崩れそうな所がたくさんあるのに、それは一切見ないで砂防ダムをつくると言つてはいる治水協議会をどうかしてほしいです。

## 日本の治水対策

中島 熙八郎氏（くまもと地域自治体研究所  
理事長、熊本県立大学名誉教授）



A photograph of a man with glasses and a white mask speaking into a microphone. He is wearing a white shirt and has a serious expression. The background is a plain, light-colored wall.

国交省は大きな災害が起こると「想定外」と言い、「責任はありません」ということを言つてゐるわけですね。 しゃっちゅう言つていて、「想定が間違つてゐるんじゃないですか」ということを考えはじめました。想定を洗つてみると、1997年から2021年度までの国交省の中の河川に係わる水管理国土保全局の予算概要を整理して、どういうことをやってきたかを並べてみました。

2005年ぐらいまでは、異常気象とか気候変動という言葉は使ってません。洪水の場所と日時が列挙されています。前線によってとか台風によって大雨が降り災害が起こりました、ということが書いてあります。それに対して何を行ってきたかというと、気候変動対策というのではない事業がほとんどです。あるとすれば、「我が国は水害に対して脆弱性を持っているんだ」ということを繰り返し言っています。東京や大阪など大都市は川の近くにあります。そこに人口や経済活動が集中しているので、そこで洪水になれば大変な災害になります。また最近の雨はどんと降ってサッと止まるので、一度にどんと流れるけど引くのも早い。その対策としてフロンティア堤防、越水しても堤防が崩れないように表面や裏面を強化して固める方法で、球磨川の最下流をフロンティア堤防化しようと考えられました。

川辺川ダムの住民討論集会を始めると、国はフロンティア堤防を言わなくなりました。しかし、2018年にフロンティア堤防が必要な災害が繰り返されたために復活します。

2006年から2009年によく気候変動という話が出てきます。IPCCなど世界的に見て雨の降り方が変わり、100年の間に1.1から1.3倍になるだろうと発表しました。それを受け日本でも水害対策のあり方を検討するのですが、具体的な政策には反映されていません。2009年に政権が変わり、当時の前原国交大臣が川辺川ダム中止を発言しました。しかし、2009年の国交省の予算概要には、「五木村を振興するために、川辺川ダムの事業は継続」と書いてあります。要するに事業としては切っていいんです。いつでも再開できるということです。それが今回です。蒲島知事もダムなしで治水を考えると言っていましたが、国は13年間何もしなかったのではと思います。

最近、バックビルディング型の線状降水帯が大

雨を降らすわけですが、国交省の文書にその言葉が出てきます。しかし、「今までのやり方はしっかりやりますけど、それでも耐えられないことがあります」と認めました。ではどうするかというと、「逃げなさい」ということなんです。お手上げということです。

国交省は2018年、流域治水と書いてます。現在の流域治水とほぼ同じ内容を言っています。ところが内容を精査すると、2020年の事業のあり方は何ら変わっていません。変わっていることは、「流域の関わる人たちが全部で協力しあってプロジェクトを考えていきましょう」ということですが、現実にはやってませんよね。菊池川も緑川も集まって話をして、プロジェクトできましたで終わりです。これが流域治水の実態です。球磨川川辺川に関して言うと、皆さんがいろいろ知っているので少し丁寧にやっているけれど、絶対入れませんよね。最終的には自分たちのペースで進めていくわけです。なので、皆さん方がこれは必要だとか、これはやつたらダメだとかいうことを、それぞれの地域で声を挙げていくことが必要だと思います。

高林：会場からご質問ご意見いかがですか。

嘉田：滋賀県の嘉田由紀子です。滋賀県が2014年に流域治水をはじめた時、国交省は相手にしませんでしたが、2021年4月に流域治水関連法案が参議院で可決されました。しかし、国と熊本県がやっている流域治水は、山のことをほとんど配慮していません。もう一つ、被害を受けるのは国交省の役人でも知事でもないんです。住民なんです。この二つが滋賀県の流域治水と大きく異なります。ぜひ滋賀県の例も参考にしていただきたいと思います。

土肥：福岡から来ました土肥です。国が出した流域治水は、今までの水害の限界や弊害を克服するような内容になっているのか、お伺いします

緒方：JRの鉄道は現在の堤防より低い所をつけています。明治時代の鉄道は絶対水に浸からない所に線路も駅もつくっています。その線路を5メートルも6メートルも超えているんです。なぜかというと、ダムとコンクリート堤防で1秒でも速く海に流そうとするから、支流からどんどん集まってきて、下流に行けば行くほど流量が増えていきますから、明治時代には大丈夫だった鉄道が浸水してしまったのです。当時は上流で溢れたり水を遊ばせたりしてゆっくり流れていたので、水位は高くならなかったのです。国のやり方はそれを脱却していません。ダムと

連続堤防をコンクリートでつくって一滴も漏らさないという治水方法です。流域治水はそのおまけとして田んぼをちょこっとするとか、しかしそのちょこっとも良くないんです。溪流をコンクリートにして砂防ダムをつくって一気に下流に流すということです。ますます増水すると思います。球磨川豪雨災害は国の政策を根本から改める良い機会だったはずなんですが、国は今までのコンクリート潰けの川作りを継続しています。

嘉田：私が滋賀県知事の時に6つのダムを止めました。でも水害は増えていませんでした。

ダムは温暖化に対しては天にツバするようなもので、1千万トンや2千万トン水を貯めても、コンクリート化してCO<sub>2</sub>を増やしいつか壊さなくてはいけないわけで、反SDGs・反気候対策という意味でもダムを選択する時代ではありません。本当に被害に遭った方たちのダムは必要でないという言葉を、もっともっと広げていただきたいと思います。

鶴：市房ダムができた時は、「100年に1回の水害を防ぐ」だったんです。ところが市房ダムができた後に次から次に大きな災害が起きて、昭和38年39年40年が特にひどくて川辺川ダムが計画されるわけです。最初は「ダムは洪水から守る」だったのですが、今は「逃げる時間を稼ぐ」になって、ダムでは防げないというのは明らかなのにこれをつくるという。去年の7月4日も市房ダム放流寸前までいきました。放流したら大変な被害になりました。本当にそういうことを考えた上で流域治水は考えないといけないと思います。

林：昨年度の洪水で全壊の認定を受けた下薩摩瀬に住んでいます。最初はかさ上げとか話はありましたけれども、最終的にはどうやって逃げるかという避難の話、隣の人と協力して逃げましょうとか、困ってる人にどうしますかとかいう話になって、結局自助共助、自分で助けて共に助けなさい、という話に落ち着きそうなんです。公助が抜けてます。

被災を受けて、それなりに家を修理したりして何とか暮らそうとしているんです。心配なのはこの雨で、昨年の記憶がよみがえってきます。近所の方も雨が降る度に避難されます。この状態が何年続くのか、山の整備にも50年とか、ダムは御免です。緊急放流と聞いた時にはぞつとしました。どうしたら、被災者の安全安心度を高めた形でどんな対策があるのか、考えたらいのでしようか。

岩崎：神瀬地区はかさ上げを要望しています。私

たちもこの間6メートルが3メートル、突然膝の高さとか言われ、「どうするんですか」って聞いたら、「ソフト面で」と言われ、「早めに逃げましょう」ってことで一緒ですね。自分たちでできることからやっている、子どもでも年寄りでもやれることを繰り返しやっていくだけかな、とみんなで話し合っています。行政の手も借りながらですね。

中島熙：国交省がどうするかを見ながら、それに合わせて自分たちはどうするかを考えると何もできなくなるんですね。岩崎さんがおっしゃったように、あんたたちがどうするか、私たちは気にせずに自分たちの地域をどうやって復興するかをみんなで考えて進めていくと、これが本当の道だと思いますね。流域治水は国交省だけに任せたらダメ。国交省が中心になるのではなくて、例えば人吉市長とか県知事とかが中心になって、国の権限と予算を持つ機関をうまく組み合わせて、地域のためにどういうことをやつたらいいのか、ということを考えるのが本来の流域治水ではないかと思います。自分たちのまちづくりを行政にして具体的な話をしながら、みんなで作っていくという道を作つて行けば、国交省はそれを無視してまで潰そうとは思わないのではないかでしょうか。

高林：行政は形式的にはまちづくり協議会とかやっているけれども、住民の要望が伝わらなくて最後はソフト対策で終わっているような感じです。シンポジストの皆さんに、住民が主役の復興、まちづくり、行政との連携や協力ができるような提案をいただきたいと思います。

鳥飼：住民から聞くのは「市房ダムがなかったらどうなったのか」ということです。ダムがない時は、水が好きだったと皆さん話しています。魚が上がってくるし、大掃除もできて楽しんでいたと、水とともに豊かな生活をしていたという事実を膨らましていく必要があるな、と感じています。

岩崎：落ち込んでいた時、ボランティアの方が掃除をしてくれて、仲間がいるんだとうれしくなりました。これから活動するにあたって、情報共有の場が必要です。新しい血脈を作つて、一緒につながつていけたらと思っています。

中島康：私たちは県に要望書を出していますが、聞いているだけで答えないいつも無力感を感じます。今、私たちができるのは、それでも言い続けるしかないと思います。人吉の魅力は球磨川です。清流がなくなったら人吉が立ち行かなくなるのではと心配しています。嫌なことも言い続けます。

中島熙：繰り返しますが、国交省だけ攻めてもダメで、林野庁も財務省も経産省もそうだし、いろんなところに声を挙げながら、自分たちのペースでできることを直実に進めてまちづくりをやっていく、ということが復興につながっていくと感じる集会でした。

齋：ダム反対の人が陳情しても一部の人の声になってしまいます。住民の皆さんには自分たちの声を聞いてくれる場所がないと言いますけれども、議員さんたちを味方にして議会に声が挙がるようにしていくことが一つ。

## 7.4豪雨災害 被災地現地見学

シンポジウムに先立つ午前中に、甚大な被害を受けた現地の見学会を実施しました。緒方紀郎さんに案内をお願いし、11名が参加しました。その概要を報告します。

一行は4台の車に分乗し、中小企業大学校を午前9時前に出発しました。球磨村渡地区を皮切りに、被害の大きかった地域を中心に、当時どのように水が流れたか、洪水の痕跡などを探し、洪水の様子を想像しながら、緒方さんの案内・説明を拝聴しながら重要なポイントを歩きました。既に被災地域の多くは、瓦礫や被災家屋などの撤去が進み、その跡を夏草が覆い、見た目では被害時の状況を実感できませんでしたが、洪水時の最高水位の痕跡や、押し流された家屋の基礎部分の傷、折れ曲がった鉄骨などを見ると、水流の激しさが伝わって来ます。

最初の見学地となった渡地区では、球磨川の支流である小川（おがわ）のピーク時の水位が国道219号線沿いに立ち並ぶ電線の上まで達していました



球磨村渡地区、小川と球磨川の合流地点

避難の話ですけれど、身の回りの物を持ってきてくださいと言われますけれど、高齢者が避難するのに持つていけません。避難する場所にロッカーがあって、そこに2、3日の着替えなど置いておけばきっと逃げられると思います。これは早急に作ってほしいという要望を挙げていただきたいと思っています。

高林：住民が主人公、議員や自治体職員と対話をしながら、復興とまちづくりを進めていくことが大切だと思います。今日の話が参考になればと思います。

とのことで、一行が説明を受けていた球磨川の堤防から更に3m以上の高さに達していたことを聞き驚きました。

復旧の目途が立っていないくま川鉄道の鉄橋は、同所から見下ろす2m程低い位置を通り、鉄道被害は起るべくして起きたと思われました。

小川の対岸にある茶屋地区は水害の常襲地帯で、住民の避難は早かったものの家屋の跡形も無く、基礎のコンクリート部分だけを残し、更地状態になっていました。

また、球磨川と小川の合流点に設置された導流堤が小川の水位上昇の一因となったのではないかという疑いもあり、河川の中にこのような構造物を作るべきなのかという疑問が湧きました。

14人のお年寄りが犠牲となった養護老人ホーム千寿園は、そこから国道を隔てた先にありますが、数日前に解体撤去が終了して更地となり、被災当時の様子は隣接する現在使用されていない渡小学校の渡り廊下の上の残骸や高台の民家に残る最高水位の痕跡で想像するしかありません。

この地域には、ラフティングの指導を行うランドアースという施設があり、ここに職員や会員の方々が危険を顧みず多くの人命救助を行ったことを伺いました。

少し上流に戻り、紅取橋下流の樋門では、樋門は本来本川からの逆流を防ぐものだが、ここでは



人吉市中神地区、紅取橋下流の樋門で洪水時に球磨川が流れを変え直進した状況を聞く参加者

上流で溢れた水が直進し、この樋門の脇を崩しながら本川に流れ込んだとの説明がありました。球磨川の河床掘削の遅れや氾濫原の樹木伐採が被害を大きくした可能性についても説明がありました。

人吉市内に戻り、復旧の目途が立たない温泉町界隈では、球磨川から溢れた出した水が、一気に二階部分まで浸水させて、温泉施設などは完全に使えない状態となっていました。

続く青井阿蘇神社では、渦流に押し流されたままの契橋の朱塗りの欄干や、楼門の痕跡を確認。同行の中島熙八郎先生からは、およそ350年前の寛文9年（1669年）にも同程度の水害に見舞われた記録が残っていることを伺いました。

一行はここから徒歩で上青井町を経て紺屋町へ。紺屋町には人気の昭和レトロの温泉や居酒屋がひしめいていましたが、残念ながら浸水し、再建の目途が立っていないと言う。山田川の少し上流の狭隘部分から溢れ出し、市街地を流れ、本川との合流部付近から山田川に流れ込み、ここで堤防を河川に向かって崩しています。更に渦流は、ここから旧河道に沿って青井阿蘇神社に向かって流れ、青井阿蘇神社前の契橋の欄干を壊しています。

今回の現地見学で、災害時の状況が見えてきました。



青井阿蘇神社、破損したままの禊橋の欄干



青井阿蘇神社の楼門で水害の痕跡をたどる参加者

国土交通省の治水は、降った雨を河川内に閉じ込め、1分1秒でも早く下流に流し、海に放流する方法を探っています。今回の洪水でも流域に降った大雨は、土砂を伴う無数の渦流となって、球磨川支流に流れ込みました。堤防に囲まれた支流の渦流は、一気に本川を目指しますが、合流点付近で河道が狭くなると一気に溢れだし、街を呑みこんでしまいました。

更に、多くの支流の渦流を集めた球磨川は、一気に水位が上がり、川幅を広げ、日頃穏やかに蛇行していた流れは、最短距離を疾走するように直線的に流れ、下流に向かって流域の家屋や建造物を次々に破壊、押し流しながら、流れ下った状況が分かりました。

果たして、川辺川に建設を目論む穴あきダムだけでこの様な状況が解消されるのか、俄かには信じられません。無秩序な山林皆伐とその後の放置、鹿による食害の広がり等で、山が荒れ、保水能力を失っています。山間部に降った雨は、一気に流れ下ることになります。また、水位が下がると、至る所に中州ができます。ダム論議の前に、次に来る洪水のためにも、河床掘削や狭隘部の拡張など直ぐにでもできる洪水対策を急ぐべきではないかと思いました。



人吉市上青井町、山田川から溢水した渦流が旧河川を通り青井阿蘇神社方面に流れた



人吉市愛甲産婦人科付近、山田川の川幅が急に狭くなる付近であふれた

## 参加者の感想

- ・被災者の会、復興会議など、まさに当事者のみなさんと豪華メンバーで住民団体の皆さん、研究者のみなさんのお話が改めていっぺんに聞けてよかったです。住民は、国や国交省にまかせずなく、声をあげていく、自分たちの声をあげていくことが必要と改めて思った。
- ・参加させていただき専門的な意識、意見が伺えて学びとなりました。
- ・「流域治水」を線ではなく流域全体を面としてとらえて考えていくことが大切だと勉強になりました。岩崎さんの「こうのせマダム」の活動など、ボランティアのあり方についても参考になりました。
- ・地元に根ざした活動や問題提起に、これまで知らなかつたことが多く、驚きと感動でした。午前中の現地調査、分かり易い説明で、納得しつつ学びました。午後の基調報告シンポジウムは、地に根づいた報告で、目からうろこでした。今回の内容をより多くの人に伝えて、ダム問題を正しく理解してもらうようにしたいと思いました。地元のにとっては、大変な復興のプロセスとなることでしょうが、少しでも前向きに取り組まれることを願っています。これからも微力ながら支援を続けていきます。
- ・豪雨災害は球磨川増水が原因とばかり思っていましたが、山崩れ、山の荒廃が大きな原因と知り考えさせられました。放置伐採木が多く土砂止め再植林もないのが崩れて当然だと思います。行政はダム建設へと進むのでしょうか、伐採木など放置されている山の現状を調査し対策を取るべきだと思います。

ダムは自然破壊し作るべきではないと思っていたが、緒方さんのお話で、建設してはいけないという事がよくわかりました。国交省、川辺川ダム緊急放流資料隠蔽は許せません。仮

に川辺川ダムがあっても水害は免れない、川辺川ダム建設は必要ないことを多くの人に知ってほしいです。

- ・現地で歩いて説明受けて、そして報告を聞いて、よく実情がわかりました。大変有意義な企画をありがとうございました。
- ・大変勉強になっています。あきらめないで考え続け、行動あるのみかと考えている。禦祥子さんのおっしゃった山・森の荒れ方がどうしようもないところまで来ていると思っている。全く関係を持っていない自分にも山や森の復活・再生を50年、100年それ以上かかるが何か役に立つことがしたいと、いても立ってもいられません。自分の寿命は10年か15年かそこらですが、何か出来ることをしたいです。是非ご指導いただきたい。やれることを教えていただきたい。お願いします。
- ・神瀬地区のかさあげについて、一川の流れが多くなるたびにかさ上げをするより、球磨川や支流の川の掘削をしっかりやって、川の流れをよくする方法は考えられませんか。
- かさあげ又かさあげでは、自然をこわす様に見えます。とにかく川の砂、石をとりのぞくことがよいと感じています。どうして支流や本流の掘削をしないのかーと川をみるたびに考えています。（何時でしたか、胸川の石を少し取り除きましたが、その後は全く動きがありません、なぜですか。）
- ・よく研究・調査されているとつくづく感じ感謝するのみです。この内容が国などに伝わればいいなー。本や資料を送って理解して欲しいとつくづく思います。2日間の集会で、県外の先生方が人吉に住む私たちよりも人吉球磨のことをよく調査されていることに驚きました。ほんとうにありがとうございます。
- ・同じテーマで八代市や熊本市でも開催してみてはいかがでしょうか。政策提言までやりましょう。
- ・国土の70%以上が森林・山だということを改めて考えたいです。



# コラム 肥後の散歩道

北岡 秀郎

(第2回)  
偏見・差別

「偏見や差別はいけないこと」だとみんなが知っている。だが実際にははびこっている。なぜなのだろうか。

今私たちのグループでは、ハンセン病家族訴訟の勝訴判決で、国に偏見・差別を求める法的義務が課せられたのをきっかけに自治体の長と懇談を持つ機会を持っている。中には、解消は「道徳教育」の問題とか「思いやりと優しさ」の醸成だと思い込んでいる首長も少なくない。多分、ことによっては命に係わる問題との自覚がないのだろう。

## 7.4球磨川豪雨災害 はなぜ起ったのか —ダムにこだわる国・県の無作為が 住民の命を奪った

「7.4球磨川豪雨災害はなぜ起ったのか」編集委員会(編) 発行:花伝社 ￥1,200(税込)

熊本県南部を襲った線状降水帯による豪雨被害は、未曾有の甚大なものでした。わたしたちは発災直後から、国、県等関係各方面に抗議・要請・説明要求などを跟ってきましたが、まともな回答のないまま着々と「川辺川ダムありき」の事業計画が進められています。

本書の出版は、「住民・県民不在の進め方を許さない」とのわたしたちの強い決意を示すとともに、全国で同様の問題に取組んでおられる多くのみなさんには、「ダムのない球磨川水系の治水」「親水・避災の地域づくり」を求める闘いを通して知り得た国交省、熊本県をはじめとする行政側の実態をお知らせするものです。

<内 容>

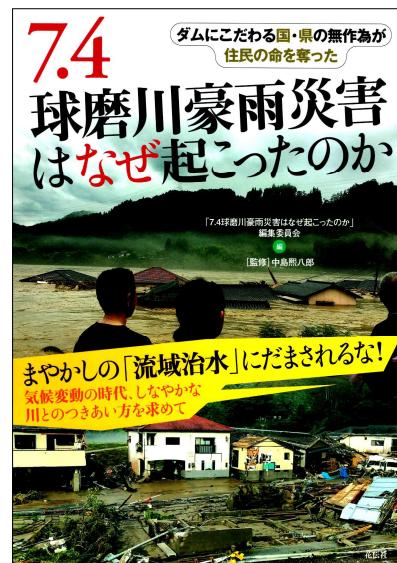
1 図解 川辺川ダムはいらない—「かさ上げ」で確実な安全安心を | 2 二〇二〇年七月人吉豪雨で何が起きたか | 3 七月四日球磨川水害検証 | 4 球磨川水害を山から考える | 5 山の荒廃と山間河川の危機 | 6 瀬戸石ダムが被害を拡大した | 7 流水型川辺川ダムでは命も清流も守れない | 8 国土交通省(水管理・国土保全局)の気候に関わる問題意識とその対応方策の変遷

昨年からの新型コロナの流行で、この問題が浮かび上がった。中にはコロナを扱う医療関係者に対する差別まで出てきて社会問題化した。

もう少し、科学的・社会的にものを見る習慣ができるいないものかと思う。「知らないもの」「良くわからないもの」に対する不安は当然あるだろう。だが今回のコロナ問題では、政府自体が非科学的だったように思う。「人流抑制」と「GO・TOトラベル」、「イベント中止」と「オリ・パラ強行開催」それに小学生の集団観戦までおまけがついた。

こんなアベコベ政治が新内閣では是正できるのかどうか。さっそく支持率調査がマスコミから発表されたが、歴代内閣の発足時に比べやっぱり低かった。

それは、そうだよね。



お貢い永めは当研究所まじ

## 編集後記

今号はくまもと自治体学校特集。豪雨災害からの復興に向けて、まちづくり・治水・行政のかかわりなど各方面から専門的な意見、また当事者からの話があった。被災者からの「毎年毎年が心配、どうしたらいいのか」の会場発言が一番心に刺さった。何より被災者の声を反映した復興・治水計画であるべきだと感じた集会だった(F)